

### 米穀問題の解決策として

#### 「米穀國營」の理由とその骨子

一日本帝國の總人口九千万人の内、内地人口の六千五百万人は米を常食とし、米に特殊な嗜好を持ち、数千年來米食を慣習として来た。これは丁史始まつて以來米を作る國として永い間農は國民の生業の本であり、明治の改革に至る迄は國の賦税も経済も米穀をその尺度として之を中心に營なされて来た。

斯様に米に就て有史以來の沿革とならゆしを待つて置く。我が國民は三度の食事も外國の供給に待てぬ限り、國民食糧の問題として米穀の需要充足は極めて至大な問題となり米はならぬ。

推定三千万人五百六十万户の農民は一年の大半を稻作に没頭し、年収六千万石乃至七千万石の依の豊凶に全家族の運命を托し、所得の多寡生産

諸費價格の高低に一絲一毫して暮して居る。米作は農業の中心でありその所得と分配は小作問題の極である。米穀問題は農家生活の問題、農村社会問題として重要な根柢を爲して居る。

農家自家用の消費額一人当り一年に一石一斗として推定三千三百万石を要し、残りの三千三百万石は毎年商品化せらるゝその價格と之に關連して生産費、課税、買債と利子の支拂等の問題は相錯錯して農家の生活を支取してゆく。

國民の消費大衆の立場から見れば一ヶ年の供給量は農村から出廻る米の三千三百万石、朝鮮米七百万石、台湾産米二百五十万石、外米二百五十万石と之に於て毎年の持越米の五百數十万石乃至九百万石之化を八百万石と計算して合計五千五百万石となる。之は農家の自家用米を差引いた國民が年々の消費量であつて一石当り二千四百圓として十一億八千四百五十万圓の米